

▶ ワークショップ「修復の実演」

有友至・中島郁子
国立公文書館

概要

定員を超える28名が実習を行いました。刷毛や和紙、糊、綴じ糸等の材料はすべて日本から別送し、裏打ち、四つ目綴じ等の日本の伝統的な修復を体験できるようプログラムを工夫しました。ほとんどの参加者が日本の修復技術を初めて体験し、生き生きとした表情で実習に参加しました。写真で雰囲気をご紹介します。

【配布資料】

繕い

*最初に虫損部分を和紙で修復します。これを「繕い」といいます。

手順

1. 和紙を虫損部分より大きめに水筆を使い、喰い裂きます。
2. 虫損部分の周りに小筆で、正麩糊を付けます。
3. ピンセットを使い、先ほど喰い裂いた修復和紙を貼ります。

裏打ち

*同じ資料を使い、次の修復作業を行います。

*資料の裏側全体に、和紙を貼り付けます。これを「裏打ち」といいます。

裏打ちは、地図、1枚ものの資料、ポスターなど応用範囲の広い修復方法です。

手順

1. 和紙を損傷資料より、周囲20ミリほど大きく切ります。(今回はすでにカットした和紙を使用)
2. 台に不織布を濡らして固定して置きます。(水刷毛使用)
3. そのうえに損傷資料を置き、濡らして皺を伸ばします。

4. 別の不織布に和紙を乗せ、糊をまんべんなく、付けます。(糊刷毛使用)
5. 不織布とともに和紙を持ち上げ、先ほどの損傷資料へ裏打ちを行います。

*時間があれば、もう1度裏打ちを行う予定です。

紙力強化

*次に両面に字が書いてある資料、及び酸性劣化資料の紙力強化

手順

1. 固定した不織布に資料を乗せます。
2. 資料より大きめの和紙を、丁寧に資料の上に乗せます。
3. スプレーで、和紙全体に行き渡るように、糊を吹きつけます。
4. 不織布を乗せ撫でます。(撫で刷毛使用)
5. 資料をひっくり返します。
6. 不織布をはがし、同じように和紙を乗せ、スプレーで糊を吹きつけます。
7. 不織布を乗せ撫でます。(撫で刷毛使用)
8. 乾燥させ、終了

和装本の綴じ

*次に和装本の綴じを行います。

*綴じ方にはいろいろありますが、今回は代表的な四つ目綴じを行います。



和紙の説明 (右)



縫いをしているところ (左)





裏打ちをしているところ (上)

日本から持ち込んだ腰の前掛けが好評 (中)

裏打ちをした資料を貼っているところ (左)



四つ目綴じをしているところ (上)



四つ目綴じの出来上がり (中)



刷毛の動かし方を説明 (下)



裏打ちをしているところ

講師略歴

有友至 (ありとも いたる)

専修大学経済学部卒、国立公文書館業務課修復係長。ガーナ公文書館職員 (2003)、アフガニスタン公文書館職員、インドネシア・アチェ州公文書館職員、アフガニスタン公文書館職員 (2006) を研修生として受入れ、講師を務めたほか、国内でも講師として各地で実技指導を行う。

中島郁子 (なかじま いくこ)

製本技術を取得、製本工房の講師を経て、国立公文書館勤務。ガーナ公文書館職員に対する研修講師 (2003) を始め、アフガニスタン公文書館職員、インドネシア・アチェ州公文書館職員、アフガニスタン公文書館職員 (2006) に対する研修の講師を務めたほか、国内でも講師として各地で実技指導を行う。